

## 令和8年度 長野県立大学・大学院入学式 式辞

新入生の皆さん、長野県立大学へのご入学おめでとうございます。また、ご両親、ご家族、ご親族そして関わりの深い方々におかれましては、これまでのさまざまなご尽力が実を結び、本日を迎えられましたことに対し、教職員一同とともにお慶び申し上げます。

本日は、本学の生みの親でもあります長野県知事阿部守一様をはじめ、各方面から多数のご来賓の方々に、ご多忙中のところご臨席を賜ることができました。この場を借りて深く感謝申し上げます。皆様にはのちほどご祝辞を賜りたいと存じます。

新入生の皆さん、これまでの受験勉強、本当にお疲れさまでした。さまざまな状況を乗り越えてこの長野県立大学の入学式の日を迎えられた皆さんに、心からの拍手をお送りしたいと思います。皆さんがいま思い抱いている大学・大学院生活への期待を、ぜひとも一つ一つ実現し、充実したそして楽しい日々を送っていただきたいと思います。わたくしたち教職員一同、皆さんの真摯な学びに対して可能な限りの支援をさせていただきたいと考えています。

大学・大学院での学修は、これまで皆さんが経験し・実践されてきた学びとは、大きく趣を異にしています。そこで、大学・大学院への入学という人生における一つの転機となるこの機会に、これからの学生生活において大切にしていきたいことについて、少しお話ししたいと思います。

まず、1つの言葉を紹介したいと思います。

分からないことを分かっていないと、分からないことは分かりません。

これは、直島翔氏の小説『テミスの不確かな法廷』をもとにNHKによって作成・放映されたドラマの中で、主人公 安藤清春氏が繰り返し発する言葉です。ドラマの評価が高かったことや独特の言い回しのゆえもあり、この言葉はドラマを象徴する印象的なものとして、Web上でも多くの人によって取り上げられています。

ここでは、私が大学教員として見てきた多くの学生がたどった学びのプロセスを具体的な事例として、この言葉の意味するところを考えてみたいと思います。

皆さんが本日ここにおられるのは、受験という試練を乗り越えた努力の成果であり、その成功体験は皆さんに自信をもたらしたことでしょう。また、大学院生のなかには、社会人としてさまざまな経験をし、自らの知識とスキルに自信を持っている方もおられるでしょう。すなわち、現在の皆さんは、自らの能力について、「自分にはいろいろなことを理解し・実践する力がある」という強い思いを抱いているのではないかと思います。

大学・大学院の講義では、教員からそれぞれの科目の内容に関する説明がなされ、関連する書籍・資料が紹介されます。まじめな皆さんは教員の説明の理解に努め、関連資料に目を

通すことでしょう。そして、教員から出される様々な課題に取り組み、授業中に積極的に発言し、レポートを提出したりすることでしょう。その過程で皆さんには、「資料・テキストを読んでいて、難しいという印象はないのに、結論としてのメッセージが何なのかわかった気がしない」あるいは「資料を読み、教員の話も理解できているのに、自分の発言やレポートに対する評価は必ずしも自分が期待したとおりではない」と感じることはあるはずです。多くの方は、そのような思いを抱いた時、自分に原因があるとは考えません。テキストや教員の説明の仕方が良くないのではないか、自分の考えに対する教員の理解が足りないのではないか…。そのように考えることが一般的でしょう。

しかしながら、そのような経験がしばらく続くと、「本はどのように読めばよいのだろうか。何を発言し、どのように書けば評価されるのだろうか。自分のどこに問題があるのだろうか」と自らに原因を求めようになります。そこで教員に質問しようとしたとき、自分の中であることに気づきます — 何を質問すればよいのだろうか…。これは、「何がわかっていないのかわからない」という状況にほかなりません。しかし、そのような状況にあると気づくことこそが、大きな一歩なのです。

その気づきの中身をもう少し詳しく言うと次のようになります。それまでの自分は、他人の考えや主張を、自分が知っていることだけをもとに理解しようとしていたにすぎなかったのです。当然のことですが、他人の思考は、必ずしも自分の理解の範囲内で成り立っているものではありません。他人の考えを理解するためには、自分がすでに分かっていることと、そうでないこととを見極めることが大切です。別の言い方をすれば、「分からないことを分かる」段階に進むことが必要なのです。そのようにして、「何がわかっていないのか」が明らかになると、「何をすればよいのか」を考えることができ、自分のやるべき方向性に向けての光が見えてきます。

とはいえ、進むべき道の先に光が見えたとしても、そこに至る道筋までが明らかになるわけではありません。その道は人それぞれであり、万人に当てはまる「1つの正しい道」を示すことはできません。しかし、自らの道を見つけるうえで、どのようなことに留意すべきかについてはお伝えできます。

それは、第1には「基礎をしっかりと身につける」ということであり、第2には「自分自身の思考法・視座を確立する」ということです。

何事も基本ができていなければ修めることはできません。キャッチボールができなければ野球選手にはなれませんし、受け身が満足にできない柔道家はいません。どの学問分野にも、基礎となる学びがあり、教員はそれを講義の中で繰り返し指摘してくれるはずです。その教えにしたがって、基礎となる事柄を繰り返し学ぶことを心がけることが重要です。

しかしながら、基本だけではできることは限られてしまいます。基礎となる学びは、その学問領域のあらゆる分野に共通のものであるがゆえに、特定の課題の解決に対しては必ずしも有効なものとはなりえません。一人一人が抱える異なる課題に対しては、基礎を超えて独自の思考法や分析手法を身につけることが必要です。

基礎をおろそかにせずしっかりと身につけ、そのうえで、さまざまな専門的知識やスキルを修得することを心がけて、これからの大学・大学院での学びを深めてほしいと思います。

皆さんが学ぶ長野県立大学は、学部は平成 30（2018）年、大学院は令和 4（2022）年の開学であり、比較的新しい大学・大学院です。また、1 学年の人数は学部で 240 名・大学院で 15 名と小規模大学に分類されます。このように新しく・小規模な大学であるがゆえに、本学は教職員と学生の関係は密接ですし、1 年次全寮制や全員短期海外留学といった挑戦的なプログラムが用意されています。さらに、学内での学びに加えて、学外のさまざまな方たちとの活動も盛んにおこなわれています。寮生活ではチームビルディングを経験し、海外留学を通じて日本とは異なる文化・考え方にふれ、そして学外での活動からは社会の成り立ちや人と社会のかかわりについて自分なりの理解を深めることができるでしょう。

大学・大学院で学ぶ 4 年ないし 2 年は、成果にとらわれずさまざまな挑戦をすることが許される貴重な時間です。社会に出ると「どれだけまじめに取り組んだか」というプロセスよりも「何をどれだけ達成したか」という結果が重視される傾向にありますが、大学や大学院では、「自分で考えて工夫し、どれだけ多くの方法を学んで実践し、そのプロセスから何を学んだか」ということが皆さんの成長の源となり、その後の人生の支えとなります。長野県立大学は、皆さんにさまざまな学びの場を提供します。それらの貴重な機会を存分に活用し、そこでの多様な経験を、それぞれの専門分野における知見をとおして、自らの生きる力に変えていってほしいと思います。そして、「地域の発展を通じて望ましい未来を創造する」時代の担い手となられることを期待しています。

皆さん、改めてご入学おめでとうございます。

ご清聴ありがとうございました。

令和 8 年 4 月 7 日  
長野県立大学長 三隅隆司